

特集 地域における特徴的な取り組み

兵庫県における薬草栽培の歴史と技術指導

兵庫県立農林水産技術総合センター 研究主幹 福嶋 昭

1 丹波市山南町での薬草栽培の歴史

兵庫県の薬草栽培は、丹波市山南町和田地区における歴史が古く、1840年（天保11年）に健胃剤としてオウレンが桑樹の間作として導入された。その後、1902年（明治35年）にサフラン、1936年（昭和11年）にセネガが導入された。最盛期にはオウレンが25ha 栽培、当時では薬草王国「和田村」として黄金時代を築いた。

近年では、1988年（昭和63年）に、当地を「漢方の里づくり」と位置づけ、和田地区内に丹波市立薬草・薬樹公園が完成した。さらに、2000年（平成12年）同公園に薬草風呂等の機能を備えた施設を整備し地域の活性化を図っている。当公園施設内には、「丹波と薬草の歴史」を紹介する常設展示室が設けられている。2003年（平成15年）には、三大薬草としてセネガ、オウレン及びトウキの振興に取り組んでいる。

なお、薬草・薬樹公園は、2010年（平成22年）4月より指定管理制度により民間企業で運営されている。

2 現在の主な栽培種類と問題点

(1) 薬草の種類

セネガ

生産者70戸、栽培面積7 ha で年間10.5t 出荷している〔薬用作物（生薬）に関する資料、公益財団法人日本特産農産物協会、平成23年12月発行〕。価格も比較的安定しており収益性の高い品目である。近年、生産者の高齢化により栽培面積は減少している一方で、問屋からは生産量を増やすよう求められている。

トウキ

生産者13戸、栽培面積1.5ha で年間1.8t 出荷している〔薬用作物（生薬）に関する資料、公益財

団法人日本特産農産物協会、平成23年12月発行〕。トウキは婦人薬の主原料となり、漢方処方にも多く用いられているが、取引価格は低いため良品質と多収量生産が望まれている。また、トウキの葉茎は、年2回程度収穫・乾燥して当帰湯に活用されている。

(2) 問題点

当地域の栽培歴史は古いが、生産者の高齢化が進んでいること、栽培規模が小さく機械化の遅れや農薬の使用制限などで手作業が多く生産労力が多い、輸入量増加による販売価格の低迷などで価格変動が大きい、生産者が少ないことから生産販売組織が弱い、などが問題となっている。

3 試験研究機関としての薬草試験地

当時の氷上郡山南町の行政機関、生産者団体の強い要望により、1985年（昭和60年）に県立農林水産技術総合センター農業技術センター薬草試験地を開設した（写真1）。本試験地は、試験ほ場約20a、見本園約5 a の他に管理事務室を有している（写真2）。



写真1 薬草試験地（丹波市山南町）



写真2 薬草の見本園

開設当初の業務内容は、「新薬草の導入に関すること」、「優良品種の選抜に関すること」、「栽培管理、収穫作業体系確立に関すること」及び「連作障害、病害虫対策に関すること」であった。

現在、薬草試験地の試験ほ場及び見本園で栽培、展示している植物は、薬草（アマドコロ、イカリソウ、ウイキョウ、ウコン、オウレン、キキョウ、シャクヤク、セネガ、トウキ、ナルコユリ、ニラ、ヤーコン、レモンバーム及びキクイモなど）、薬樹（イチジク、エンジュ、カリン、キハダ、クコ、クスノキ、クワ、ゲッケイジュ、コノテガシワ、サンシュユ、タラノキ、トチュウ、ナツメ、ナンテン、ハナミズキ及びモチノキなど）である。

これまでの試験研究結果の学術誌等の発表課題名は、以下のとおりである。

- (1) セネガ黒根病に関する研究「兵庫県農総センター研究報告30号（1982）」
- (2) シロナンテンの生育と結実「園芸学会雑誌 61別2（1992）」
- (3) ミシマサイコの発芽促進「兵庫中央農技センター研究報告41号（1993）」
- (4) ヒロハセネガの種子発芽に及ぼす温度、貯蔵条件及び播種前処理の影響「近畿中国農業研究91（1996）」
- (5) ヒロハセネガの生育の季節的変化並びに生育、収量に及ぼす遮光および花穂除去処理の影響「近畿中国農業研究93（1997）」
- (6) セネガの栽培と収量および有効成分の収率との関係「第26回生薬分析シンポジウム

（1997）」

(7) セネガの発育生理と栽培について「薬用植物研究1998（2）」

(8) 水田輪作が連作障害に及ぼす影響「日本生薬学会第51号年会（2004）」

4 最近の試験研究内容と結果の概要

チューブ灌水と局所施肥によるトウキの高品質・多収生産技術

(1) 目的

トウキは、夏期の土壤乾燥により収量や根の形態品質が低下する。そこで、灌水が収量と品質に及ぼす影響並びに減肥について検討する。

(2) 栽培方法

肥効調節型肥料（エコロング180日タイプ）を畝中央部に基肥施用し、土壤乾燥時（梅雨明けから8月下旬）に点滴灌水チューブにより約1.5リットル/株・日灌水する（写真3及び写真4）。



写真3 畝中央の点滴灌水チューブ



写真4 夏期乾燥時でも生育旺盛



写真5 掘り上げ時の株（12月下旬）

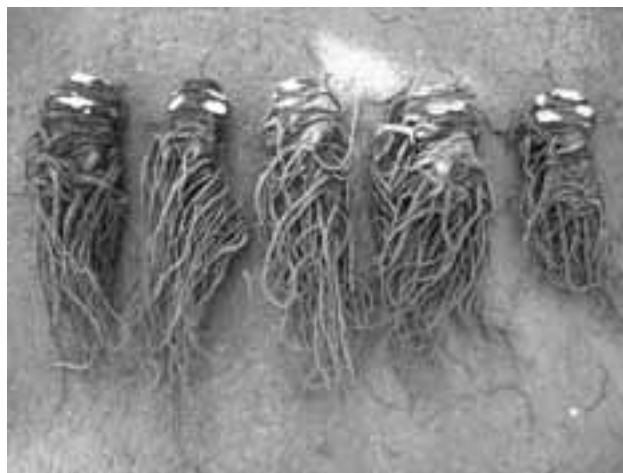


写真6 乾燥時のトウキ根（2月下旬）

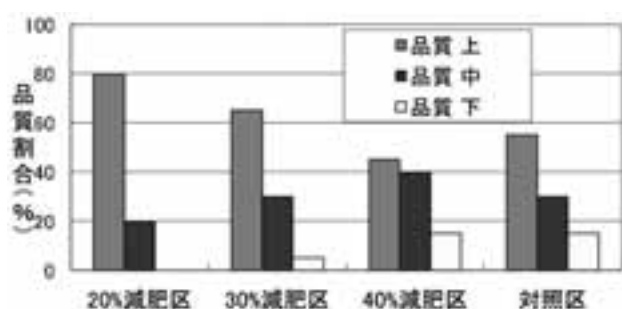


図 土壌水分を保てば減肥栽培しても高品質トウキ根の割合が高まる

(3) 結果の概要

基肥に肥効調節型肥料を20～30%減肥してチューブ灌水すれば、慣行栽培に比べ約1.5倍の収量と高品質な形態のトウキ根が生産可能である(写真5、6及び図)。

(4) 技術の活用

5 a 程度の栽培ほ場であれば、500リットル程度のタンク、点滴灌水チューブの敷設で容易に施工でき、落差を利用すれば灌水の手間が省ける。肥効調節型肥料と局所基肥施用により大幅な減肥栽培が可能であり、追肥を省略することができる。

5 おわりに

薬草試験地は、設立当初の目的がほぼ達成できたことから、試験研究の規模を大幅に縮小し、現在は研究課題「トウキ根の省力・安定生産技術の確立」のみを実施している。

その他の業務としては、現地生産者の技術相談、トウキ部会におけるトウキ採種の協力や部会活動の支援及び試験研究成果の紹介などである。